B 135

北方少数民族〔ウイルタ〕の刺繍と衣服について（第5報）

元屋美短大　田中淑乃

目的　北方少数民族の一つ、ウィルタ（オロッコ）には、シベリヤ大陸のツングース系民族によく見られる「アムール河流域紋様」とも呼ばれる紋様がある。この民族の歴史にも非常に関心をもったのであるが、それ以上に伝承されている紋様を刺す刺し方と、その色彩の美しさに、民族の文化としての民族的美を感じるのである。日本家政学会37回大会以後「北方少数民族ウイルタの紋様と刺繍について」の研究発表を行ってきた。ウイルタ民族は非常に少数であり、戦後サハリンから北海道に移住したという経緯から日常生活の中で着用されていた民族衣装はもとより その他の残存資料は少ない。その上サハリンでの生活経験をもつウイルタ族もまた 年毎に少なくなってきている。この歴史的状況を踏まえ、彼らのもつ優れた民族の伝承文化としての刺繍とその色彩の美しさに深く興味をもち 聞きとり調査を続けて行ってきた。

方法　文字をもたない民族であるため、刺繍に関して資料となる文献がない。故に、残存資料の調査とサハリンでの生活体験をもつ複数のウイルタ婦人からの聞きとり調査により記録をおこない それを基に実際に製作を試みた。その中からサハリンで採集されたという衣服の刺繍を中心に報告する。

結果　衣服に刺繍をほどこすには 飾るという目的と共に 着用するに耐えうることが必要である。この点を考慮したと思われる方法を用いている衣服が認められた。刺繍は芯状のものを用い、立体的に表現されており、裏打ちと思われる痕跡があり、これは革という地の補強のためであろうと考えられる。